
竜の墓守

生クリーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の墓守

【Nコード】

N2285B

【作者名】

生クリーム

【あらすじ】

勇者が竜王を封印して二千年。少年アレクは、竜王の墓の墓守を務めていた。しかし突如、彼の住む街を戦火が襲う。アレクは竜王の復活を止める事が出来るのか――

第一章：墓守

徐々に太陽が昇り、辺りは明るくなる。

まだ夜も明けきらない早朝の山の中。その一箇所、木が切られ石で舗装された、比較的開けた場所があった。

そこは”竜の墓”と呼ばれている遺跡で、二千年前に世界を支配した竜王・ヌバヌバが封印されている。

そしてその竜の墓に、こんな時間から一つの影があった。

「ふう、これで良しと」

そこにいたのは少年だった。その茶髪は寝起きというのも相俟って、普段よりも更にボサボサだった。

彼はたった今、清流から汲んできたバケツの水を半分程瓶に移すと、その瓶を祭壇に置く。そしてバケツの中の水を撒いて、辺りを清めた。

「よし、これで終わり。あゝやっと帰れるぜ」

少年はそう言うと、欠伸をしながら大儀そうにバケツを仕舞う。そして腹減った、と呟きながら山道の長い階段を下って行った。夜はすっかり明けていた。

彼はアレク・フレーシエという十七歳の少年で、竜の墓のある山の麓に住んでいる。

彼の先祖は、二千年前に竜王を倒した勇者・フレーシエその人である。彼の一族はここ東のフレーシエで、二千年もの間、竜王の胴体の骨が封印された竜の墓の墓守を務めてきた。

アレクも十五の時に、父から墓守を受け継いだ。それ以来毎朝、ああして祭壇を清めているのである。

尤も面倒臭がりのアレクとしては、墓守など重荷以外の何物でも無い。

「ただいま、親父。腹減ったよ。何か食い物ある？」

帰って来たアレクは手も洗わずに、テーブルにあったパンを口に放り込む。

「先に手を洗わんか。――墓に異常は無かったか？」

アレクの父が皿を洗いながら尋ねる。アレクは、今度は卵を放り込んだ。

「何も。いつも通りさ。異常なんてあるわけ無いぜ」

「アレク、甘いな。油断は禁物だ。今は戦争中で、いつ敵襲があるとも限らん。いいか、我ら墓守というのは……」

「はいはい、如何なる時も敏感に適切に、だろ。――馬鹿馬鹿しい。竜王が復活するわけないさ」

アレクは飲み終えた牛乳のコップをテーブルに置いた。

「どこへ行く」

朝食を終えて立ち去ろうとしたアレクに、彼の父は尋ねた。

「別にどこも。昨日は寝るのが遅かったから、もう一眠りして来る」
アレクはそう言つと、扉の向こうへと消えた。ここで初めて、アレクの父は微笑んだ。

「セオドアのヤツが帰って来るらしいぞ」

「何だつて！ セオドア？」

途端に足音を立てて現れるアレク。父の小さな呟きは、きちんと聞き取れたらしい。

「ああ、お前が帰って来る少し前に村から伝言があつてな、昼まで

には帰って来るだと」

セオドア・フレイシェ。

彼はアレクより三歳年上で、兄貴分だった。昔は剣術の稽古と称して、よく一緒に遊んだ。今はこのカハラニア王国の国軍に所属している。

ちなみにアレクとセオドアは、名字は同じだが、血が繋がっているわけではない。東のフレイシェでは、皆の名字はフレイシェなのだ。これは、海の向こうにある西のフレイシェでも同じ事がいえる。

「分かった。じゃあ街にでも行ってみる。昼飯はいらねえ」

アレクはそう言うと、玄関へと向かった。

「あまり、遅くなるんじゃないぞ」

「分かってるって」

アレクは家を出る前に、戸口に立て掛けてあった二振りの剣を掴み、腰に差す。護身の為というものもあるのだが、彼はセオドアに剣の上達振りを見てもらいたいのだ。

「じゃ、行って来る」

アレクは外に出て歩き出す。街へと向かうその足取りは軽かった。

「そろそろ帰って来る頃か？」

フレイシェの街の市場。年がら年中賑わっているこの市場に、アレクはいた。

「そうか。そーいやセオドアが帰って来るんだってな。しかし軍属たあ、立派なもんだ。こっちに帰って来るのは何年振りだ？」

「二年振り」

恰幅の良い屋台のおじさんの問いに、アレクが答える。フレイシェは小さな街だ。街の人々も、セオドアの帰郷の事は知っているらしい。

アレクは、屋台で買ったサンドイッチにかぶりついた。

「おっさん、これウマいな。もう一つ買っわ」

「毎度あり」

アレクが二つ目のサンドイッチを食べ終わった時だった。

「よっ。チビ」

突如、背後から聞こえたその単語に素早く反応して、アレクが一瞬で振り返る。

「誰がチビだ！」

「……確かに、もうチビとは言えないな」

「当たり前だっ！」

そこには、二年振りに会うセオドアがいた。

二年という月日を経て、アレクの目の前にいるセオドアは、記憶の中のセオドアとは、やはり違っていた。その金髪はもつと長かったし、昔よりも遅くなった印象を与える。

「何だ。二年も会わなかったからって、俺の顔を忘れたのか？」

しかし、その声や陽気な喋り方は、やはりセオドア自身だった。

「んなわけ無えだろ。それより、いつ帰って来たんだよ。セオドア」
アレクはサンドイッチの包み紙をグシャグシャに丸めて、ポケットに突っ込んだ。

「ん？ たった今だ。お前の姿が見えたから、寄ってみたんだ」

そう言つて、セオドアは笑った。

「なあ、前みたいに剣を見てくれよ。あれから俺、結構上達したんだぜ」

腰に差した双剣を見せながら、アレクが言う。

「いいけど、ちょっと待ってくれないか。寄りたい所があるんだ」

「寄りたい所？」

聞き返すアレクにセオドアは、ああと頷く。そして竜の墓のある山の方を見た。

「ちよつと墓参りにな」

「しかし懐かしいな。昔はよく登ったよな、俺とお前とジェニで」
山道の長い階段。周りには誰もいなかった。竜の墓付近の共同墓地へと、二人はひたすら登り続ける。

「俺なんか毎日登ってる」

不機嫌そうに言うアレクに、セオドアは納得した。

「そうか。今はアレクが墓守なんだな」

アレクは、フンッと鼻を鳴らした。

「あんなの面倒なだけだ。冬なんかマジで最悪だぞ。雪が降ったら、寒いなのって」

セオドアは、まあまあと言いながら笑った。

なだらかな傾斜を描く、少し広めの広場。小さな白い墓石が等間隔で並ぶフレーシェの共同墓地。

ここには、七年前の大洪水で亡くなったセオドアの両親やアレクの母親、生きていれば十六になるアレクの弟のジェニの墓がある。

土が剥き出しの地面には、落ち葉や雑草などとは見当たらない。

「ここに来るのも二年振りか」

感慨深そうに目を細め、当たりを見回しながらセオドアが言う。

「言っとくけどな」

少し前を歩くセオドアの背中に向かって、自慢げにアレクが言った。

「俺なんか四日に一度はここに来るんだ。昨日も来て、ここら辺を掃除した。見るよ、ゴミ一つ落ちてないぜ」

アレクは、共同墓地の墓守でもある。

「はいはい、えらいえらい」

セオドアは、苦笑しながら言った。

やがて、一つの墓の前へと辿り着く。花崗岩で出来たその墓石に

彫つてあるのは、セオドアの両親の名前。

「俺も、母さん達の墓に行つて来るわ」

少し居心地の悪くなったアレクはセオドアに告げると、逃げるように立ち去る。セオドアは横目でそれを見て、やがて墓に向き合つた。

一方アレクは一直線に、母親と弟の墓へと行く。そして、どこから取り出した花を置いた。

四日に一度は来るといつても、その都度墓を拜むわけでは無い。初期の頃はそれこそ毎回のようには拝んでいたが、最近ではそれも稀になった。

この墓の下には何も埋まっていない。母親も弟も、死体が見つからなかったのだ。それも墓を拜まなくなった理由の一つである。

（母さん、ジエニ）

アレクはそれでも一応、形式上の墓へと話し掛ける。

（まあ、特に何も無いけどな。セオドアが帰つて来たぜ。すぐにまた行くらしいけど）

墓を拜むのは久しぶりなのに、アレクは話す事が無かった。

（じゃあ、また来るわ）

馬鹿らしいとは思いつつも、別れを告げる。

見るとセオドアも終わったようなので、アレクはそちらへ歩き出した。

「ここは平和だよな」

セオドアが、そつと呟く。

「まあ、近辺で戦争は無いから」

「帰つて来る時に、色々見た。南部は酷かったぞ。どこもかしこも焼け跡だ」

セオドアは、顔をしかめながら言う。

「やっぱり竜王派か？」

竜王派。それは二十年程前に、突如現れた勢力である。彼らは竜王又バヌバを神と崇め、カハラニア王国へと宣戦布告をしてきた。

「ああ。今カハラニアに敵は、奴らしかいない」

セオドアは、空の彼方を見上げながら言った。

「ふーん。——それよりさ、セオドアはもう初陣は済んだのか？」

突然アレクが興味深そうに尋ねる。

「まあな……と言いたい所だけど、実はまだなんだ。士官学校を卒業したばかり」

「士官学校？ 将校にでもなるつもりかよ」

アレクは驚いて聞き返す。セオドアは、まあなと呟いた。

「せっかくフレーシエを出たんだ。今だって見習いだけど、小尉だしな。なるなら將軍にでもなつてやる。そうしたらフレーシエも有名になるだろうな。大將軍セオドア様の故郷って」

熱弁するセオドアを珍しく思いながら、アレクは言った。

「フレーシエは今だって有名だろ？ 竜の墓があるから」

夏の風が、二人の間を通り抜けていった。

第二章：夜襲

「アレク、起きるか！」

「うへえ……もうちょつとだけ……」

「馬鹿者！」

ここでアレクは、目を覚ました。寝ぼけ眼で辺りを見回す。父親が、引き剥いだアレクの毛布を持って立っていた。

「何だよ。まだ夜じゃないか。もう少し寝かせろよ」

寝起きのため、少々機嫌が悪いアレク。

「外を見てみる」

「ああ？ 外あ？」

アレクはぶつぶつと文句を言いながら、のろのろとした足取りで窓辺まで行く。大儀そうに窓を開けた。

「……………！ なっ、何だよあれ！」

眼下には、フレイシェの街が広がっている。しかし深夜だというのは、街は赤々としている。

街が燃えていた。

「恐らく竜王派だ。とうとう来たか」

「りゅ、竜王派あゝ？ 何で今更」

こんな状況にあっても、父は至って冷静だった。アレクは、慌てながら服を着る。

「早く着んか。墓へ行くぞ」

「墓？ 街の方はどうするんだよ。こんな夜更けじゃあ死人が出るぞ」

慌て過ぎたため、掛け違えてしまったボタンを直しながら、アレクが言う。

「今更街へ行ったとて、焼け石に水。どうにもなるまい。街は街の

人に任せよう。彼らとてフレーシェの民。こんな事態位想定しておろう」

「で、でも……」

それでも納得出来ず、アレクが言い淀む。

「それより今は墓だ。奴らの狙いはおそらく竜王の骨。それだけは絶対竜王派に渡してはならん。もしそうなれば、又バ又バの復活さえも可能だろう」

父の口から改めてその話を聞く事によって、アレクはようやく事態の重さを確認した。急いで靴を履いて、双剣を腰に差す。

「親父、速く！」

アレクは玄関を飛び出し、父を振り返った。

「先に行かんか！ お前は若い。先に行って何としても骨を死守しろ」

アレクは、分かったと言って家の裏手へ回る。そして、風のように速く階段を登り始めた。

「はあっ……はあっ……」

長い長い階段を、アレクはひたすら登る。二年間登り続けただけあって、木々に阻まれ殆ど光が届かない暗闇の中でも、迷わずに進める。

しかし、体がついていかなかった。突然の夜襲であまり寝ていない。普段なら平気なはずの彼の体力も、既に限界に近かった。

自然と足取りは遅くなる。

「はあ……クソっ！ もう少しで竜の墓なのに！」

誰にと無しに悪態を吐いて、アレクは木製の手すりに寄りかかった。額の汗を手の甲で拭う。

（火、さっきより大きくなってやがる。セオドア達、死んでねえよな？）

アレクの脳裏にセオドアや、友人達の顔が浮かび上がった。
僅かばかりの休憩後、アレクはよし、と喝を入れた。気力は十分にある。まだ走れそうだった。

その時、不意に辺りの空気が変わった。

「何だ？」

アレクは敵が来たのかと思い、腰の双剣を引き抜き両手で構える。
そして、油断無く辺りを見渡した。

（近い……）

アレクは感じた。何かとんでもないモノが、もうすぐそこまで来ている。彼は、剣を強く握り絞めた。

そしてソレは分かった。目を凝らすと、燃え盛る街から小さな黒い点が、こちらへやって来るのが見える。

小さな点は、徐々に大きくなる。暗闇の中、アレクの目はソレを認識した。

「うへえ、マジかよ。ドラゴンかよ」

ソレは、一頭のドラゴンだった。色は分らない。背中に二人の人間を乗せていた。

「おいおい。ドラゴンを操れるのは竜王だけじゃなかったのかよ。
まあ、竜王派の事なんか知らねえけど。……ってマズいマズい！
早く行かねえとだった！」

幸いドラゴンも竜使いも、暗闇に紛れていたアレクには気付かなかった。

アレクは剣を鞘に収めると、ラストスパートをかけた。

第三章：アレクの戦い

竜の墓前の広場は、仄かに明るかった。

長い階段を登り終えたアレクの目に映ったのは、一頭のドラゴンだった。アレクは慌てて木の陰に隠れる。剣を鞘から抜いた。

その竜は体長およそ三メートル。破壊された祭壇の奥に広がる洞窟の入り口を、番人よろしく見張っていた。

いつも空だった二つの松明受けには、松明が赤々と灯っている。洞窟は迷宮になっていて、その最奥部に竜王の骨が封印具と共に封印されている。

人間の姿は見当たらない。既に洞窟内に入ってしまったのだ。

（俺も入りてえけど……あのドラゴンが邪魔だよな）

ドラゴンは強い。そして敏感である。アレク如きが戦って、勝てる相手ではない。

（それなら……）

アレクは、足元に落ちていた手頃な石を拾う。そして共同墓地の方へと、思いつ切り投げた。

——ガッン、ドス。

石は緩やかな放物線を描きながら、木に当たって落下した。運良く松明受けの一つを掠めて、それをなぎ倒す。

大きな音がした。

ドラゴンがすぐに反応し、そちらを見やる。のっそりと立ち上がって歩き出した。

（よし、今だ！）

アレクは、ドラゴンが目を離れた洞窟へと駆け出した。

しかし、

——ガキイン！

突然、アレクの体を衝撃が襲う。

やはりドラゴンは侮れなかった。走り出したアレクに気付いたドラゴンは、その太くて長い尻尾で、強烈な一撃を加えたのだった。とつさに剣を交差させてガードするも、アレクは吹き飛ばされ、地面を転がって、崖に体を強かにぶつけた。

「痛つてえ……」

至る所に擦り傷はあるものの、幸い大きな外傷は無かった。骨折も無いようだ。

アレクは、左の額から流れる血を拭いながら立ち上がる。尻尾が掠ったのだろう。

「……！　ってマジかよ」

ふと見ると、左手に握っていた剣の刃が、中頃から無くなっていた。ドラゴンの攻撃に耐えきれず、ガードした時に折れたのだ。

「クソっ」

その間にもドラゴンは近付いて来る。

両者は対峙した。アレクは汗ばんだ手で、剣を握る手の力を強める。

何としても逃げなくてはならない。剣が二本あっても適わないのに、この状態では尚更だ。

アレクは少しずつ洞窟の方へと移動する。元からそれが目的だったし、ドラゴンは大きすぎて入れない。竜使いも、そのためにドラゴンを置いておいたのだろう。

少しずつ、だが確実に洞窟のそばまでやって来た。アレクは、横目で距離を確認する。

「ギヤアアア！」

「！」

ドラゴンが前足を振り上げた。アレクはタイミングを見計らって、左手に持っていた折れた剣をドラゴンの顔に向かって、勢い良く投げた。

アレクの目論見通り、ドラゴンは振り上げた前足で、その剣を払った。勢いを消したドラゴンの前足は繰り出される事無く、その場へ着地する。アレクはその隙に洞窟へと、出来る限りのスピードで走り出した。

とうとうドラゴンを出し抜く事に成功した。

「やったぜ！」

更にスピードを上げるアレク。洞窟まであと二メートル、という地点に来たときだった。

突如アレクの顔の前に、棒が突き出される。

「うおっと。危ねえ」

持ち前の反射で、アレクは難なくそれをかわした。

「敵か？ …… ったく、次から次へと！」

一歩後ろに飛んで、アレクが叫ぶ。

「ここは通さない」

不意に、澄んだ声が發せられた。その声は高く、凜としている。

男の出せる声域ではない。

「……女？」

アレクは驚いた。相手が女性であるという可能性は、全然考えていなかったからだ。

洞窟の中から、一人の女性が出て来た。恐らくは長いであろう黒髪を束ね、黒と緑の服を着ている。端整な顔立ちだった。髪と服が闇に溶け込んでいるためか、肌はやけに白く見える。何を考えているのか分からない表情は、まるで人形のようにだった。

アレクは初めて見たのだが、彼女の着ている服は間違い無く竜王軍の兵服である。しかし若い。アレクは女性の年齢など分らないが、彼女――少女といっても大丈夫だろう――はアレク程若かった。「その剣をルビイが折ったら、あなたの武器は無くなる。抵抗はしないで下さい」

ルビイとは、ドラゴンの名前だろう。少女は機械的な口調で言った。それと同時に手に持った槍を構える。

「なっ、あっちの剣は二千ミラの安物だったんだよっ！ こっちの一万ミラもしたんだ。あっちの五倍は上等だぜ」

アレクも左手で剣を構える。炎に照らされて、少女の瞳の奥で金色の光が光った。

「忠告はしました。引かないというのなら、例え民間人と云えども……覚悟！」

あくまで事務的な口調で言い、少女は槍を繰り出す。同時に、背後のドラゴンも襲いかかってきた。

なかなか強い。アレクは最初の鋭い突きを間一髪で左にかわすと、右腰に差していた鞘を抜く。ぐずぐずしていられない。ドラゴンは、すぐ背後まで迫っていた。

続く彼女の石突きでの攻撃を剣で受け止めると、その瞬間アレクは、左手に持っていた鞘を投げた。

「邪魔だあ！ そこをどきやがれっ！」

「っ……！」

少女がひるむ。アレクはその隙に洞窟へと身を滑らせた。

「投げるモン位、いくらでもあるんだよ」

洞窟の中からアレクは叫ぶ。その声は岩壁に、幾重にも反響した。

アレクは暗闇の中を走る。この迷路は幼い頃からセオドアやジェ二と遊んだ場所である。アレクは小路の一つ一つまで熟知していた。アレクは小川を二つ三つ飛び越え、少し遠回りをした。あの少女

が付けているとは考え難いが、一応念の為だ。

しばらくアレクは走り続けた。やがて前方が明るいの気付いて、そつと近寄る。

封印の扉の前に、銀髪の男がいた。背中しか見えないが、恐らく三十代中盤。少女と同じく、竜王軍の兵服を着ていた。

強力な魔法で封印してある扉は破られていないようなので、アレクはホツとした。

突然、男が振り返る。

「そこにいる者、出て来い」

「！」

アレクは思わず岩壁に隠れる。はったりかと思っただが、男は正確にアレクの方を見据えていた。

「出て来ぬのなら、こちらから行くぞ」

アレクは、仕方無く姿を現した。

「貴様、この人間か」

「……そうだ」

「この扉を開けられるか？」

「例え開けられたとしても、てめえなんかの為には死んでも開けねえ！」

アレクは啖呵を切って、男を睨む。男はじりじりと近寄って来た。「なかなか勇ましいな。死ぬ前に名を聞いてやろう。名は何という？」

アレクも間合いを保ちつつ、言い放つ。

「……アレク・フレーシエ。竜の墓守だっ！」

「アレク——守護者という意味だな。では守護者よ、さらばだ」

男は言い終わるなり長剣を抜いて、切りかかってきた。殺気がほとばしる。

適わないとみたアレクは、一旦引こうと振り返って——
「うへっ、マジかよ」

肘が岩壁に当たった。間合いを取ろうと、いつの間にか移動していたのだ。

退路は塞がれた。

「アレクよ、よもや逃げようというのではあるまい」

アレクは胸中で、馴れ馴れしく呼ぶなと毒づく。

彼は左腰に差した剣を抜き、両手で構えた。一本だけというのが、心許ない。

「貴様の腕を見てやろう。どれ」

男は舞うように剣を繰り出す。一撃、二撃、三撃。剣一本で戦い慣れないアレクは防戦一方だった。

「どうした。そんなものか？」

必死で男の攻撃を受け止めるアレク。彼には、男が本気を出していないのが分かった。

「うるせえ！ 俺はもともと二刀流なんだよっ！」

アレクの限界も近かった。剣で受け止める度に衝撃が体を揺らす。手が痺れ、感覚が無くなってきた。

（クソつやべえな。眠い……）

アレクが眠気と疲れで足元もおぼつかなくなった時。

「すみません、將軍。遅くなりました」

あの黒髪の少女がやって来た。その言葉にアレクは驚く。

「し、將軍だとお？」

將軍という言葉の意味を飲み込むまでに、アレクは少々時間を要した。

「ほう、アレクよ。私の事を知っておるか」

「まさかお前は……ストレッド!? 本物か？」

呆然とするアレクの目の前で、男はニヤリと微笑んだ。

「如何にも。私の名はアーノルド・ステレッド。竜王軍の將軍だ」

第四章：封印解除

アレクは改めて目の前の男を凝視した。

アーノルド・ステレッド。その名は、カハラニア全土に知られている。竜王の末裔、極悪非道の反逆者。それがこの男だとは、どうしても思えなかった。

「さて、アレクよ。遊びは終わりだ。——リーディア。早くしなさい」

「はっ」

アーノルドの命令に、少女——リーディアはサッと敬礼をすると、封印の扉の方へと歩き出す。

「なっ……何をやる気だっ！」

アレクは思わず扉へと走り出した。しかしすぐにアーノルドによって阻まれる。そしてリーディアの手が扉に触れた。

「アレク。よく見るがいい。二千年間破られる事の無かった竜の墓は、今開かれるのだ」

リーディアは呪文を唱えているらしい。

「でもフレイシェの施した封印は、誰にも解けない筈だ」

扉が呪文に反応して光り出す。それを目の当たりにしたため、アレクは自信無さげに言った。

「確かにフレイシェの封印は見事だ。誰にも破る事は出来ぬであろう。しかしあの娘は私の知る限り世界で唯一、あの封印を破る事の出来る人物なのだよ」

アーノルドは自分の作品を誉めるように言うと、ニヤリと笑った。
「くっ……ヤメロオ！」

アレクは叫ぶ。それと同時に辺りは眩い光に包まれた。
「！」

ついに扉は開いた。

アレクは呆然と開かれた扉を見つめる。その中には、底なしの闇が広がっていた。

「將軍。作業が終了致しました」

振り返ったリーディアはアレクを一瞥した後、アーノルドの方を向きやる。

「御苦労。後はいい。下がっている」

「はっ」

リーディアは再び敬礼をして、後ろに下がった。アーノルドはアレクに向き直る。

「な、何だよ」

アレクは剣を握り締めた。少し後ずさる。切っ先が揺れた。

「少し黙っていて貰おう」

アーノルドはそれだけ言いつと右足を振り上げ、

「！」

アレクを蹴り飛ばした。

「痛っ……ガッ！」

アレクは剣でガードしたものの、勢い良く後方に吹っ飛んだ。そのままズズズツと背中から滑る。アーノルドは何事も無かったかのように、踵を返した。

「うへっ、痛てて……血が出てやがる。ってオイ、待て！ 待ちやがれ！」

アレクがヨロヨロと立ち上がった時、既にアーノルドは扉の中に入っていた。

「あゝ面倒くせえな。クソッ」

悪態をつきながらも、アレクはアーノルドを追う。疲れ切った体に鞭打って走った。

扉の前には当たり前のようにリーディアがいる。相変わらずその

姿は闇に溶け込んでいる。

アレクは通り抜ける時に警戒をしたが、予想に反して彼女は何も仕掛けて来なかった。

「？」

アレクは不思議に思ったが、通してくれるに越した事は無い。迷わずに闇の中へと入って行った。

扉の中は何も見えなかった。アレクはこれ程の暗闇は初めてだった。

突如、声がする。

「リーディア！」

アーノルドの声だった。思ったより近い。その声は洞窟内をうわんうわんと反響した。

「来なさい。もう一つ封印があつた」

すぐにリーディアの声も響く。

「はっ。ただ今参ります」

その残響はしばらく洞窟内に残る。

（もう一つの封印……。そうか、剣の封印の事か！）

アレクは昔、ジェニと一緒に聞いた話を思い出した。

竜の墓に施されている封印は二つある。

一つは先程リーディアが解除した扉の封印。これは勇者フレイシエが魔法で扉に施した、侵入者を拒むもの。

そしてもう一つが、勇者フレイシエの使った名剣・ディアナによる、竜王の骨を直接封じ込めたもの。

（剣の封印が解かれたら、もう終わりだ。でも、俺じゃあアイツに勝てない……）

アレクは少し迷った。恐らくアーノルドでは封印が解けないのであろう。リーディアは段々と近づいて来る。今、アレクがとるべき

最善の手段とは――

「来るなっ！」

アレクは暗闇の中、音を頼りにリーディアの背後に回り、その手を右手で捻り込む。何も見えない状況に、少し戸惑った。

「アーノルド・ステレッド！　ここから去れ！　もし言う事を聞かないのなら……」

アレクは左手で腰の剣を抜いた。その刃をリーディアの喉元に、触れない程度に当てる。アレクはアーノルドの方に向かって大声で言い放った。

「コイツを殺す！」

勿論はったりである。アレクはリーディアを殺すつもりなど毛頭も無かった。

「コイツを殺せば、封印を解ける頃が出来る者はいなくなる。どうするんだ」

アーノルドからの反応は無い。アレクの前に広がるのは暗闇だけである。

動いているのか、止まっているのか。近づいているのか、遠ざかっているのか何も分からない。アレクの五感は闇に呑み込まれ、徐々に麻痺してきた。

（何でアイツは何もしないんだ？）

依然、何の反応も示さないアーノルドに、アレクは不信感を募らせる。

その時。

洞窟内が振動した。

「うわわ、地震かっ？！」

揺れはなかなか収まらない。アレクは倒れないように足で踏ん張った。

「ルビィ！」

リーディアがアレクの手から滑り出て、奥へと駆け出す。

「ちよっ、テメ、待て！」

アレクも一足遅れて、彼女の後を追う。しかしその行く手を、落石が遮った。

「ギヤアアア！」

アレクの耳に聞き覚えのある鳴き声が届いた後、洞窟内が一際大きく振動した。アレクは落ちてくる岩に押し潰されないように、慎重に進む事しか出来なかった。

アレクが最深部の広間に辿り着いた時、そこには夜空が広がっていた。天井部を構成していた岩は、隅の方に転がしてある。

今まで何も見えない暗闇にいたため、アレクは星の光だけでも内部の様子が見えた。

広間の中心に、リーディアがルビィと呼んだ竜がいた。先程の揺れと落盤は、この竜が引き起こしたものだろ。その側にはアーノルドもいる。

そしてリーディアは――

「ヤメロオ！」

奥の祭壇。そこはしめ縄で飾られ、小さな社があった。その中に竜の骨はあるのだ。

今、まさにその戸に手を掛けようとするリーディアの姿があった。アレクはわき目も振らずに走る。彼は、自分が何を言っているのか分からなかった。

「俺が――」

アレクが祭壇に到達する。社の内部から青白い光が漏れた。

「竜の墓守だあつ！」

光が強くなった。社が砕け、四散する。

そして中からは竜王の胴体の骨と――それに突き刺さった、青い光を放つ剣が現れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2285b/>

竜の墓守

2010年10月9日08時23分発行